

## 増田明美さん（スポーツジャーナリスト）

千葉県いすみ市出身。成田高校在学中、すべての陸上長距離種目で日本記録を更新。84年のロサンゼルスオリンピックで初めて採用された女子マラソンに出場するも途中棄権。現在はスポーツジャーナリストとして、テレビ解説やコラム執筆に加え、NHKの朝の連続テレビ小説のナレーターを務めて話題になった。日本パラ陸連会長、大阪芸大教授、国際NGOプランインターナショナルジャパンなど多方面で活動を展開している。

### <障がい者スポーツと“きっかけ”>

2019年11月に開催されたドバイ世界パラ陸上は連日NHKが総合テレビで生中継しました。パラの大会を地上波で生中継するなんて10年前には考えられなかったことですよ。12年のロンドンパラリンピックでスカパー（CS放送）が連日放送したことでパラスポーツにも注目が集まるようになり、13年に東京オリンピック、パラリンピックが決定してから各メディアもパラスポーツを数多く取り上げるようになりました。

オリンピック、パラリンピックの開催によって社会に様々な変化がもたらされます。東京では駅のバリアフリー工事を多く見かけますし、海外からのお客さんを迎える観光地もバリアフリーの意識が高まっています。社会を変える取り組みには、やはり“きっかけ”は欠かせません。

私がマラソンを走っていた1980年代初頭は、やっと女性が路上を走り始めた頃です。それ以前は、女性が鞆を出して街を走るなんてはしたない、そういう世の中だったんです。皆さんお忘れかも知れませんが。東京国際女子マラソンが1979年にスタートし、81年には全日本実業団女子駅伝、82年に大阪女子マラソン（のちの大阪国際女子マラソン）、83年には日本女子の強化のために横浜国際女子駅伝（09年に終了）と次々に創設。テレビ中継で注目されたこともあり、女子の長距離選手の裾野が一気に広がりました。そんな中、私がマラソンに挑戦することになったのも84年にオリンピックに女子マラソンが採用になったことが“きっかけ”でした。

日本パラリンピックの父と言われているのが中村裕（ゆたか）さんです。1960年、英国のストーク・マンデビル病院に留学し、グットマン博士に師事。64年の東京パラリンピックでは選手団長を務めました。その中村さんが提案して81年に始まったのが大分国際車いすマラソンです。世界初の車いす単独のマラソン大会で、今では2000人超のボランティアが運営を支え、小学生が沿道で応援する姿も。

子どもの頃から障がい者と接していれば、大人になってからの接し方が自然になりますね。特にヨーロッパに行くと感じるのですが、みんなが障がい者を特別扱いせず、社会に溶け込んでいる印象を受けます。身近に障がい者がいない子どもにとっては、パラスポーツに触れることで何かを感じ取ってくれるはず。今回のプロジェクトでも、社会を変える「きっかけ」を作るような、そういうスポーツイベントが生れることを期待しています。